

## 親子ことばの相談室での体験談

— 吃音との歩み そして これから —

磯野 直春（仮名）

### 〔直春君のこと〕

「先生、磯野、直春です。覚えていますか？ 中学生の時、吃音症で指導を受けていました。…」のメッセージが留守電に残されていました。

その2週間後、9年ぶりに、凛々しく成長した直春君と、時も忘れ3時間もの間、吃音の事、そして、趣味と就活の事も語り合いました。

吃音で特に辛かった中学時代の出来事、楽な発語を得てからの自身の心の成長と吃音への向き合い方、そして、これから就く仕事（趣味？）への期待と情熱を熱く語ってくれました。

この度、この語らいの中から、特に「楽に声が出せる」ようになってからの吃音に対する自身の価値観や対応の変化を中心にまとめてくれることをお願いしたところ、その翌日に届いたのが、この体験談なのです。

修論そして就活の大変な時期に、早速、吃音で悩む人々の心に響く体験談を届けて貰い、とても感激すると共に感謝しています。

私は現在大学院二年生で、学業の面では研究に励んだり、研究内容を日本語や英語でプレゼンをしたり、趣味の面では車やバイクを整備したり、直した愛車でドライブしたりと充実した日々を過ごしています。そんな充実した日々を過ごしているのも中学一年生から三年生までお世話になった親子ことばの相談室（＝相談室）のおかげだと実感しています。

私は、東日本大震災の影響で山形の小学校に転校してきて、そこから中学三年生まで山形で過ごしました。

相談室に通うことになった理由は中学生になり、皆のように話すことができない事実をより気にするようになったからでした。具体的により吃音を意識するようになった出来事は、発表でどもったためクラスの人から笑われたり、自分ではいい発表だと思っていたのにそれがうまく話せず、伝わらないことが悔しかったりしたことです。また担任の先生に宿題の質問をしに尋ねたときに「先生、ここがわからないのですが教えてもらえませ

んか」と言いたかったのですが「ここがわからないのですが」の「こ」が出ず、ただ先生と呼んだだけで20か30秒ほど固まってしまう、そこで先生が「よく聞きたいことを整理してからもう一度きなさい」と言われたこともありました。その時は聞きたいことも聞けない、言葉が出ないことを理解してもらえていないことがつらかったのを覚えています。

それらのような経験から不便なく話せるようになりたいと日に日に思うようになり、母に相談しました。そしてそれから母が見つめてくれた相談室に定期的に通うようになりました。そこでは梅村先生が楽な声の出し方を教えてくださり、今まで意識したことなかった方法で楽に声が出せたので自分でも信じられない気持ちになったのを覚えています。何度も通ううちに、まずは母との会話で楽に声を出せるようになり、それから学校でも吃音のようなものが完璧に出なくなったわけではありませんが、確実に以前より楽に声を出せ、長時間ブロックするようなことは格段に少なくなったのを覚えています。

中学二年生になり、クラスを率いることに挑戦したいと思ったので、学級委員長になりました。学級委員長はクラス全員の前で発言することが多く、授業前のあいさつなど仕事の一つにありましたが特に問題なくできていました。クラスメートの前でしか発言する機会がないと思って学級委員長になったわけでしたが、ある時担任から、学期はじめに全校生徒の前で「今学期の目標」を発表しないかと提案されました。運が良かったのか悪かったのか分からないのですが（今では良かったと思っています）、偶々私のクラスの学級委員長がその発表の担当に割り当てられていました。学級委員長は男女二人がなるのもう一人の女子もいたのですが、その子は学年の学級委員長のリーダーだったので、必然的に私が引き受けることになったのです。その時は担任の先生に吃音だから難しいと相談をしましたが、先生は「大丈夫、君ならできる」と言っていたのを覚えています。今ではその対応にとっても感謝していますが、当時は先生が吃音を理解していないからそんなこと言えるのだろうと先生の対応に不満を感じていました。

発表することが決定したので、梅村先生も含め、ことばの教室の先生方の前で本番を想定した練習をしました。そこで楽な声で発表練習をすることで、段々と「楽に発表できている自分」をイメージすることができました。そして不安が少しずつなくなっていくのを覚えています。とはいうもの、全校生徒450人の前で発表などしたことがなかったので発表当日はかなり緊張しました。全校生徒、先生方が私の一声目を聞くために耳を澄

ませているので、体育館が物凄くシンとしていたのをいまだにはっきりと覚えています。ただ、「俺には教えていただいた楽な発声の仕方がある」と自信があったので、練習通り発音することで、特に目立つような吃音は出ず、発表することが出来ました。そしてその経験から、人数が400人以上であろうとも、30人であろうとも身につけた発声方法であれば話せると大きな自信になりました。後から聞いた話だったのですが、実は担任の先生が母に「彼は将来人前で話すような人になるので、全校生徒の前で発表させてもいいでしょうか」と相談してくださっていたようで、それを聞いたときは私のことを考えてくれたのだなと嬉しくなりました。

中学三年生になって、自主的にあらゆる行事でリーダーになり、学年の前で話したり、全校生徒の前で話したりとこれまで以上に人前で話すことを自分から選んでいきました。

話が変わりますが、同じ部活だった友達も相談室に通い、吃音が改善していました。彼は先生、友達とも話せなく、相槌でコミュニケーションをとる人でした。だから周りの友達は、彼を「話をしない人」と見ていました。

たまたま母同士仲が良かったので、私の母が彼の母に相談室を紹介し、彼も通うようになりました。相談室に通ってからは、話せるようになり、周りの友達からも他人と思われるほど彼が変わっていったのを覚えています。部活のメンバーでさえ彼の声を今まで一度も聞いたことがない人が多かったので、みんな彼が話せるのをみて驚き、そして彼によく話しかけるようになっていきました。私はそれをみて、自分のことのように嬉しくなったのを覚えています。理由は私自身も吃音のつらさを知っていたので、それを乗り越えて話せるようになって嬉しいだろうなという共感の気持ちと、吃音が改善することで本人自身が変わり、そして周りの人などの環境も大きく変わることに希望のような嬉しさを感じたからだと思います。

今現在、少なくなったものの相変わらず吃音を意識して生活していますが、吃音のせいでやりたいことを諦めたり、人間関係がうまく構築できなかったりなどの支障はなく生活をおくれています。

むしろ今振り返れば、完全に個人的な意見ですが、吃音という障害を通して学んだことがプラスに活着ていると思います。

具体的には人の話を真摯に聞くようになりました。私がブロックで言葉

が全くでなかったときに最後まで聞いてほしいと思っていた経験からきていると思います。

今現在、塾で塾講師としてアルバイトをしているのですが、生徒のどんな些細な悩み、相談でも雑に聞くのではなく真剣に聞いています。ですので生徒も心を開いてくれたり、学校のことなどを彼らから話してくれたりします。生徒から絶大な信頼をされていると感じますし、自分で言うのもなんですが、私はとても人気な先生だと個人的に思っております。(笑)

他にもプラスになったと感じる点を挙げると、話す前に頭の中で整理して話すので、表現力、説得力や鋭い洞察力を持った発言が出来ている点、障害を乗り越えてあらゆることに挑戦し、結果がでているという事実が自分へ大きな自信をもたらしている点、そしてそれらを総合して自分という人格が形成された点など沢山あると思います。

先ほど述べた通り、これは完全に私個人が感じた吃音をもたらしたプラスの点なので、他の方には全く当てはまらないこともあると思いますが、吃音を持つ私が正直に感じた点であることを考慮していただければ幸いです。

今でも話すときに梅村先生から教えていただいたことを意識したり、家で音読をして楽な声の出し方を練習したりしています。また、「吃音ノート」という自分専用の吃音改善ノートを書いております。そこでは自分なりに楽な声の出し方を見つけたら忘れないように書いたり、なにか発表やプレゼンなど話すことに関して嬉しいことがあれば自分の自信をつけるためにその出来事を書いたりしています。そうすることで吃音のことで落ち込んだらそのノートを見て自信を持返したり、忘れていた楽な声の出し方を思い出したりしています。

繰り返しになりますが、充実した日々を過ごしているのも相談室のおかげだと思っています。中学生という多感な時期に話すことへの苦手意識がなくなったことで、その時しかできない沢山の経験を諦めずに済み、今の自分があるのだとこの文章を書きながらより実感しています。